

《ロンドンからのたより(両親宛)》・1974c ～グロスタープレイス綴れ模様:その3～



1974年8月22日

お父さま&お母さまへ

昨夜、ずうっと憧れだった「湖水地方 Lake Districts」での5泊6日の旅程を無事に



終えて戻ってきました。鉄道とバスを乗り継いでの一人旅でしたから、かなり不便ではありましたが、でも随分と周到に旅行プランを練って考えましたし、最高に愉しかったと言えます。いろんなところ随

分と精力的に見て歩きましたし、自然の懐に抱かれるって気持ちを久々に味わいました。こんなに心の晴れ晴れとしたこと、ここ久しくなかったように思われます。

それがね、「湖水地方」の景色が余にも美しすぎて、どう私のカメラで写真撮っても、実物のように思えない。ほんとに「まるで絵のよう・・・！」と感嘆してばかりだったの。だから、今回の旅行では写真は数枚しか撮らず、代わりにとても手頃な小冊子を買いましたのでお送りします。ご覧になってね。



まずは「湖水地方」の入り口ともいえる Ambleside(アンブルサイド)の町に私は3泊しました。宿泊したホテルはたまたま離れの個室に空きがあり、独りで気楽な別荘気分を満喫したことになります。石橋(Bridge House)の近くの

滝から流れる水の下流にあって、ドヴァドヴァと水音がかましいほどでしたが、十分にくつろぎました。滝までへの散歩道は冷え冷えとして、木に絡まるツタの深い緑色は驚くばかり



でした。《テート・ギャラリー》で見た、グラハム・サザーランドの描いた風景画の中の樹木や群葉そのままの色だったのが感動的だったの。ちょっと凶暴なまでに草木がうっそうと生い茂っているというわけ。いつかお母さまと一緒にいった岩倉の奥の『貴船神社』での景観を思い起こしました。それで可笑しいのよ。ついお素麺が急に食べたくなったわけ。下宿に帰り着いたら、ちゃんと小包みが届いていて、中にお素麺が入っていたものだから、すごくすごく嬉しかったです。

さらにその先の Windermere(ウインドミア)に足を延ばしたのですが、この



帯の風景を湖水の遊覧船から眺めたのが実に素晴らしかった。この付近で2泊したホテルの絵葉書を同封しますので、ご覧になってね。こじんまりと品のいい、まあ上の下程度のホテルでしたが、珍しく家族連れも結構いたりで、ホテルだとしてもお行儀をうるさく言われるから、子どもにしてみれば、むしろ野外でのキャラバンの生活のほうがいいんじゃないかなと思ったり。どっちがどっちとも言えないけど、富裕層だとしても金を使うことばかりがいいとも限らない、子どもにはちょっと不便な暮らしを体験させるのもいいんじゃないかなとか、ちょっとお節介なことを考えてたり・・・。ホテルのサービスは行き届いており、居心地は抜群に良かった

です。この辺の散歩道はまったくよく整備されているの。私は湖畔沿いをただ気分に散策するだけでしたが、眼にするものすべてが嬉しくて嬉しくて…。夕暮れ時など殊の外に風情がありましたし。この景観を独り占めしてるのがほんと勿体ないほどでした。



ひんやりとした湖畔の澄んだ空気を吸いながら、ふと、『愛知県女大』時代にISAというサークルの皆で賑やかに信州の白樺湖に赴いた記憶が蘇ったの。名古屋大学やら他大学との合同合宿で、湖畔のキャンプ場で3泊過ごしたんだっけど。当時はエア・ポケットに入ったかのような閉塞感のなかにおいて、すべてが靄がっているけど、それは唯一、我が青春の華やいだ一齣ともいえるものです。懐かしいと同時に妙な感覚を覚えるのは或る記憶のせいだけ…。私のグループの班長さんは「大脇新次」とおっしゃる名大出身のOBの男性でしたんだっけど。この合同合宿を企画した名大の人たちが後で編纂した《白樺湖の想い出文集》を手渡されてページを繰ると、その中に彼の綴った感想文が載っていて、私のことに言及し、なんと＜偉大なる成長を期待する＞という言葉で結ばれてあったの。たかが【愛知県女大・児童福祉学科】の一年生の私にだよ。その大仰な彼の言葉に、特に目立った振る舞いをしたはずもないのに何だろと訝しく、戸惑った覚えがある。だけど、ふと思ったの。誰かの目に自分がどう映るのかって不思議だね。もしかして‘私が知らない私’を誰かが私以上に分かってくれてるなんてことがあるのかしらと…。当時は笑い飛ばしただけだったけど、なにやら彼の励ましにポツと胸に灯りが点いたみたいで忘れ

難いのよ。その大脇さんという方は《帝人》に就職なさったとか、風のたよりで聞いている。＜国に経済的な力が欲しい…＞との彼の言葉が心に残ってるけど。当時私たち若輩者は誰も、日本が世界に伍してゆくにはあまりにも貧弱だと憂いていた。だからこそ、それぞれが選んだ途で、国の行く末を我が双肩に担うといった気概があったように思う。厳肅に大真面目に…。なんだか私たちって健気だったなあと振り返って思う。

あそこから随分遠くに来たもんだと、今更ながらの感慨に耽ってたわけ。もはやあの当時とも私は違う、今は或る程度人生の難関をくぐり抜けて、これからは大変な人生であっても、生き甲斐を持ち得るだけの場を与えられ、またいろいろな人からの援助・激励をも得ての話なので、私は迷いも不安もなく、堂々と生きてゆける気がしたの。ようやくにして此地でやってゆく自信を得たような気がしてるのです。

振り返ってみて、なんとも‘危ない綱渡り’の連続でヒヤヒヤもので、イギリスに留学しているという実感もまるで乏しかったし。それが今や「湖水地方」で英国人にすんなり溶け込んで旅行客の一人としてくつろいでいることが夢のよう…。まだまだ‘彼らの一人’になるには程遠い現実なのは承知してるし、やはり遠来の‘お客さま’でしかないわけ。だからこそ、彼らと共有できる話題があるということがなんと云っても大事になります。だから、「湖水地方」を旅してきたのよって、病院の同僚にもいつか話せると思うと、なんだか‘彼らの一人’として、まさにとば口に立った感じなのよ。またまた背伸びしちゃうって感じではありますけどね。これもそれも



すべてが両親のお蔭です。何年か後に私の方に余裕が出来ましたら、ぜひこの「湖水地方」へ両親をも連れて来なきゃって思ったのです。ですから、夢を持って、ぜひぜひお達者でいてくださるように・・・。

今回の旅で、更に嬉しいおまけは、『ピーターラビットのおはなし』で日本でも知られた、有名な絵本作家ビアトリクス・



ポター (Helen Beatrix Potter) がかつて住んでいたという《ヒル・トップ》を訪れたことなの。牧羊地のひろがりに田舎家が転々とする、見事な景観でした。温かな陽射しのなかで小径を歩きながら、気持ちが優しくほぐれてゆくような、もうすっかり閑かな気分になっていたの。だからなのか、妙なことに、あんなに飽き飽きしていたロンドン中央という大都会へ戻ってくるのが妙に嬉しくて、ここ Gloucester Place 近辺の賑わいやら車の騒音やらがまるで気にならず・・・。雨ばかりの日続きだったのが、今日はとても明るい気持ちのいいお天気だからでもありますけれど・・・。それでね、さぁー頑張りましょうって気になっているのが自分でも至極嬉しいです。

昨夜帰ってみて、日本から小包みが届いていて小躍りしました。まあここしばらくは儉約に努め、‘塩を舐めて’ぐらいにと、ちょっぴり悲壮なというか、殊勝な気分になっていましたのに、何のことはない。私はラッキーに出来ているんですねえ。それで早速にお味噌汁をいただきました。おかしなことに旅から戻ると、必ずお味噌汁が欲しくなる。元気回復にいいのかしら。まったく有難かったです！ では又。 千鶴子より



1974年9月13日

お父さま&お母さまへ

お蔭さまですべて順調に行ってます。先日、セント・ジョージ[St.George's]病院に初出勤というか、いろいろと必要な事務的な手続きを片付けに行ってきたわけです。児童精神科外来(Department of Child Psychiatry)という建物の入り口付近に待合室があり、それと隣り合わせに秘書室があって、つまりそこが受付の窓口でもあるわけ。既に顔なじみになっている秘書のジーンが居ました。ブロンドの髪で笑顔の綺麗な、さすが子ども慣れしてるというか、とっても人好きのする、いい感じの女性なの。早速、私も彼女のお世話になりました。‘私の部屋’(!)の鍵を手渡され、案内してもらったのよ。一応プレイルーム[遊戯室]と称してるんだけど。室内はさほど広くもなく、実に簡素なの。机と2脚の椅子があり、洗面台、それに砂箱、窓際には電話機が置いてあるという具合。鍵の掛かる収納庫もあり、私物やら予備のものやらはそこにに入れておくの。窓枠は鉄格子で開閉できるし、中庭の青い芝生が覗けますから、居心地は悪くありません。それが、どうやらスタッフの皆さん方はまだ夏季休暇からお戻りではないみたいなの。こちら英国では優に1ヶ月やら一ヵ月半やらとどなたも夏季休暇はたつぷりと休むわけ。だから、週1回恒例の「ケース会議」も来週からということなので、今週は私も敢えて出勤しないことにして、仕事始めは来週からということで秘書のジーンと話を済ませてきたわけだけど。なんとまあ、万事がのんびりしているわけなの。

その後で病院の「事務局」の方にも立ち寄り、お給料をもらう手続きなど一切済ませましたし、私の方も気楽に出番を待っているところです。月末にお給料が出ますが、税金とか

差し引かれることを考えたら、どうなるか解んないけど、どうやら思っていたよりもいいのよ。1セッションが4ポンド22ペニーで、週5セッションだから、まあ自活はこれで出来る目途が付きまして。それでも交通費が1回往復で50ペニーだから、週3回通うとしたら、ちょっとした額になる。どんなものかなと内心不安がっています。

来学期の授業料の件についてはお話ししておりましたとおりですが。一昨日 £250 の送金を受け取り、至極恐縮しております。タヴィ事務局からの請求はまだ届いてませんが、そろそろ納入時期かと思われまして、今月の23日のタヴィでの集会の折に、主任教官のミセス・ハリスに尋ねてみようと思っております。そのうち、そちらに領収書を送りますので。いずれ職に就いて、生活も落ち着いたら、自分の方の家計のやり繰りをよく考えて、その時点で、無理なら親に支援をお願いしようかとも考えていたのですけれど。やはり安堵しました。なにかとご配慮いただきまして、とにかく感謝しております。

それから、以前にもお話ししておりましたが、懸案事項といえますか、タヴィの研修コースで訓練生 trainee に必須とされる「教育分析 (Personal Analysis)」の件。私の場合、いよいよ来学期以降始めるようにと勧められているわけです。主任教官のミセス・ハリスから或る方をご推薦いただきました。経費のことですが、相場は分析セッション1回につき4～5ポンドでして、1週5回のセッション数が規定です。従って1ヶ月見積もると100～120ポンド掛かると見込まれます。もはや尻込みばかりしてる事態でもありませんので、本日、ご紹介いただいた分析家のミス・ドーリーン・ウェデル (Doreen Weddell) に直接お会いする機会を得ました。それでセッションの金額設定の件ですが、彼女は、1回につき

4～7ポンドという一応の幅を持たせた言い方で、私にどのくらいなら支払い可能なのかって尋ねたわけでしたが。5ポンドというところに結局落ち着きました。彼女が言うには、私の方は、それで十分満足です。そういう線でやっていって、様子を見てみましょう。それで貴女の方にも少し余裕が出来るようになれば、額をあげてゆくことも考えてもよろしいですし……って、おっしゃる。彼女、60歳以上のごく年齢を召した方だし、つまり経験も相当にあるだろうわけだし。私が病院で1セッションにつき4・22ポンドの報酬を貰っているのに、彼女が5ポンドじゃ、ちょっと悪い気持ちがないでもなかったけど。今のところは、どう考えても、それが精一杯のところですから、私としてはホッとします。それで10月から開始ということに話を決めて来ました。来週からでもよろしければって言われたけど、仕事始めたばかりで、何かと気持ちが落ち着きませんし、9月分のお給料が入った後で行くなら、経済的に無理はないかと思ひ、10月以降にしたのです。とにかく始まってみないと分からないことなのですが……。そういう次第なもので、9月の末(或いは10月の初め)に送金して下さるときは、これ迄の額にすこしばかり加算した形でお願いできますか？ 大体80ポンド程度でしたら、なんとか大丈夫と思われるかしら？ ほんとに済みません。そういう線でしたら私の方も頑張りたいと思っております。

来学期は4つもセミナーの受講が予定されてます。それに病院の仕事に、教育分析でしょ。とにかく頑張って乗り切らなくちゃ……。でもつくづく私は至極ラッキーだって思ってるのです！ 絶対に実りの多い年であることは間違いありません。3年目は金を稼ぐ実力も付いていると思いますしね。ここもう1年が勝負です。何卒どうぞ宜しくお頼み致します。では又。千鶴子より
.....



1974年9月16日

お父さま&お母さまへ

こっちの気候は、なんとまあ、げんなりするぐらいです。毎日雨ばかりでうっとおしい！地下鉄などはちょっと蒸し暑いぐらい。部屋の中ではストーヴを付けて、窓を少し開けてという具合にして、まあ適度に気持ちよはしているけど、どこへ出掛けるのも億劫になります。

ところがつい先頃、例の【英国錦鯉協会 British KoiKeepers' Society】主催の催し物がありまして、ちょっと躊躇したんだけど、なんでもスライドもあるとかだし、日本の風景が懐かしいかなって思い立ち、すぐ近くが会場だったこともあり、出掛けてきました。日本からお越しの方、神畑重三っていう方で姫路に本店のある錦鯉の業者なんだそうです。BOAC(航空会社)の招きで、突然渡英という話が持ち上がったらしく、大概のところ業者は業者としか関係しないものらしいんだけど、この機にと、【愛鱗会】の会長の黒木健夫氏やら副会長の東京在住の神谷龍氏やらから直々に依頼があったとかで、シールさんやら【英国錦鯉協会】からの申し出を急遽受けて立ったという経緯のようでした。こちらの【錦鯉協会】も、会場探しやら事務手続き上難儀した模様でしたが、それでも何とか雨の中を会員の120名ぐらいは軽く来ていて、かなり盛況だったのです。凄いでしょ？スライド上映は新潟でつくられたPR版でしたが、結構綺麗だったの。それから質疑応答の討議があり、つまりは錦鯉の病気の話に尽きて、薬の混合の仕方とか、えらく専門的なことになって、通訳の方が四苦八苦しておられました。私はまあそういう話には乗ってゆけないので、今回 Mr.アレンやら Mr.シールに手渡されてあった《鱗光》の雑誌を

ペラペラめくっては読んで、面白がっていました。Dr.川口先生の投稿文も読みました。神畑氏と彼の会社の若手社員のお二人、堂々として立派におやりだったと思う。神畑氏なんて実に悠揚とした印象で好感を持ってましたしね。黒木会長から預かった書状(扇子みたいな、和紙の折り畳み形式！)をパラパラと開いて全員の目の前に見せたら、皆がワーッと感嘆の声をあげたり・・・やっぱり珍しいからかな。そんなちょっとしたパフォーマンスもしたりだから、なかなかの凄腕よね。でも逆に、英国のアマチュアの「鯉キチ」には驚いた一つ！て、やはり感心しておっしゃってました。神畑氏も大いに学んだところがあると思う。何と云っても初めて招聘された日本からの「鯉専門家」の講演ということで、此の度のことは日英双方にとって画期的なことでもあったのです。ポーリングが、これもあれもみんなチズコからことが始まったのだよって言うのよ！あらまあ・・・だわね。【英国錦鯉協会】はまだまだ団体としての経済力(団結力)が貧しいからか、歓迎にしても日本とは雲泥の差がある。それでも、最後に会長の Mr.アレンがお二人に記念品として、なにやら本を贈呈されたのよ。それは上出来だと思った。神畑氏側は勿論それ以上は期待していなかったとは思うけど。お開きの後なんか、熱心な会員の中には、ご自分の庭の写真を持ってきて嬉しそうにお二人に見せるやら、ご自分が育てた錦鯉の稚魚をビニール袋に入れて来てわざわざ見せるやら・・・専門家の眼には、ちゃちに映つただろうに、でも彼らなりに<ワンダフル！>とか上手に褒めてあげて、英国側の方たちも結構嬉しがっていたりだから、日英友好関係進展の風情がなくもなかったわけ。ただ通訳の方が十分な準備も打ち合わせの時間も無しで依頼されたらしくて、相当四苦八苦してました。ミセス・西崎とおっしゃるその方、よくやったなあとは思う

けど。錦鯉についてはど素人で、付け焼刃的な知識では通訳がツーカーとやれるものじゃないけど、英国側としてはちょっと不満だったみたい。(金を払っている以上は・・・って気があるものだからね。)そんな何やらで、お開きの後お茶をご一緒にとお誘いがあるのかと思ったら、あちらの皆さん、結構遠くからお越しであるからでもあるけど、もう神畑氏とはさよならって、あっさりしておいで(一緒に親しくお茶を飲むとかいう、個人的な友情関係はちょっと遠慮するというか、まあどちらも一様にシャイだからでもあるけどさ)、やはり‘英国的’だなあと、私はつい思ったわけ。私は自分が彼らと全然関係なくもないので、これでハイ・さよならではどうも良心が咎めるので、どこかご案内するからということ、彼ら一行(通訳の人も含めて)とご一緒に英国側の方々とはバイバイ・さよならしたのでしたが。時間が遅くて、何をするのももう遅いし、コンサートは趣味じゃないって若い方が言うし、そんなわけで、彼らの宿泊してるホテルに戻り、ロビーで熱いチョコレート・ドリンクを飲んで、それから話に話が弾んで、実に愉快なひとときを過ごしました。社長の神畑氏は、10年の昔から、ヨーロッパ各地で錦鯉を売り込んでいるんですって！そういう次第だから、今度もその当時以来の知り合いの業者とか、あちこちでいろいろな会合が予定されていて、翌日にはなんとフランスに行かれましたよ。私、やるなあって感激しちゃったよ！錦鯉って、そんなに日本の大きな輸出産業だとは思わなかった。週に5日は、外国各地へ錦鯉を送り込んでいるって、彼言っていましたけど。凄いものですね。夕食をご一緒にと神畑氏におっしゃっていただいたのですが、遅くなるからとお断りし、通訳のミセス・西崎と、そのパートナーの英国の男の人の迎えの車に便乗させていただき、下宿先まで送り届けていただいたの。彼女、いい人でしたよ。

‘同胞愛’というのも変だけど、私の知らないところで生きてる、知らない日本人たちの生きざまに触れ、その逞しさに大いに刺激を得たという意味合いでも今回の出来事は格別に嬉しかったと言えます。さあーて、来週からは多忙になるなあって、覚悟しているところです。

では又。かしこ 千鶴子より

◎追伸：今夏ピーター・バローのアレン夫妻のご自宅をお訪ねした折の写真をいただきましたので同封します。



こじんまりとした平屋建てのお宅で、ごく慎ましいお暮らしぶ

りだけど、庭の錦鯉の池はさすがにでっかいの！実は、Mr.アレンの会社って結構規模の大きな堂々たるもの。それを他人顔に話すもので、そこ



の会社の社長さまと話してるって感じじゃないから愉快なの！相変わらず飛び切りのいい方たちでした。赤ちゃんの錦鯉〔稚魚〕が気泡装置のある水槽に入れてあって、キッチンでそれらを飽かず眺めて楽しかったの！Mrs.アレンって、料理の腕前は全然さっぱりで、それは本人の認めるところなのよ。その代わりというか、ゲラゲラ笑ってお喋りばかりだったから、すごく楽しかったです！



.....



1974年9月25日

お父さま&お母さまへ

セント・ジョージ病院の仕事は、まだ自分のケースを担当していないもので、なにやら慌ただしいようで暇なようで、変てこな日々です。本格的に腰を据えて仕事に取り掛かれるのは2週間以内のことだろうと思ってます。目下、‘組織の一人’になるという帰属意識を意識させられてる。病院の新規採用者に義務付けられている必要要綱があれこれあって、まずは身体検査で、レントゲンとか血液検査やら、広い敷地のあっちこっち院内を引っ張りまわされているって感じでした。さらにはオリエンテーションみたいなのに出席を求められたり、さらには他の新規採用者たちと一緒にそろそろあちこち他の部門をも見学して回ったりしたのは実に面白かったわけ。特に整形外科のADL訓練の場なんて、頑張っているなあって感心したり…。それから最新の設備を誇っているというのかしら、血液検査なども総てオートメというか、機械がどンドン処理して記録してゆくという具合で、たまげたあって感じなのでした。それから、印象に残ったのは、院内の病棟一つひとつが必ず誰かしらの名前に因んで呼称されているわけ。おそらくセント・ジョージ病院の歴史に貢献した人たちなんでしょうが。伝統を重んじるというか誇り高い気風からか、なにやらそれもいいなって感銘を受けた次第です。

病院の職員食堂のお料理の献立がそりゃ素晴らしいの。もう美味しくって安くて…。可笑しいけど、それが楽しみで通勤の1時間ほどの地下鉄の長旅もまずまず我慢できるというのが本当なのです。いろんな人がいるけど、やっぱりいい人が相対的に多いというのが率直な感想です。‘彼らの一人’になってる自分を意識し

てます。なんと云っても、これ迄と違って、安定感が出来ました。来年はタヴィで幾つかケースが持てると思うし(ちゃんと報酬があります)、それ迄、十分じっくりと急がずに、実力を付けておけるわけだから実に恵まれていると云えます。

私の直接の上司であるミスター・ブレンナーは既にお話ししてありますように、ご自分が引退前という気持ちがおありだからでしょう、とにかく私に力を傾けてくれている感じなの。特に初めの頃は、精神科医が一応面接したケースを引き継ぐわけで、いちいちその連絡の橋渡しなどもしてくださり、あまり私に適當じゃないケースとか、状況がどうも面白くないのはさっさと引き下げてくれますし。随分と私にとって重宝というか、まことに有り難い、利用価値のある存在と云えます。他の職場では心理職というのは、訓練生でなくとも、全然選択権も与えられずにケースを担当させられると聞き及んでおりますし、彼の庇護下にある私などおそらく特別とも云えましょう。

先月、ペピの観察記録のレジメをタヴィのミセス・ハリスに提出しなくちゃいけなくて、それ終わったあと、そのコピーを一つ、ミスター・ブレンナーにも差し上げたのだけど。最高級の賞賛をもらいました。私などは、どうしても見かけが柔らかくておとなしいので、もう一つ職能などという、さてどんなものかと思われるのは当たり前で…。それが知れば知るほど、感心することが出てきて、皆さん本当にびっくりするなり、喜んでくださっておいでなのです。期待されているという感じは悪くありません。

それにやっぱりセラピイのケース(症例)が持てるのはすごく嬉しい！なにやら夢のような…。精神分析を学ぶ上で臨床の実践体験の裏づけが持てることは切実にもう助かる(!)って気持ちなのです。同僚には先輩のジャニファーが居ます。アメリカから留学してきて、今タヴィの

3回生なんだけど、とっても力強いのです。いろんな人がいっぱい居て、ドクターが多いのですが、私なんか若過ぎるぐらいなの。皆が皆ほとんど中年以上で、キャリアも積んでるわけで、なんとも自信ありげだから、否応もなく私は圧倒される思いだけど。一つひとつケースを通じて仕事上の関わりが広がり、気心がお互いに知れる迄は大変です。ともかく、【教育分析】も1週間後に控えていますし、タヴィでのセミナーももうじき開講なのね！それが今最も自分の生活で肝心なこと。まあ、気持ちを落ち着けて、一つひとつ今与えられている課題をやりこなしゆかなくてはと思っています。そんなあんなで今のところ気持ちがいっぱいってとこなの。当分はたよりすらも出来ないほどになるかと思われます。心配なさらずに、どうぞ安心していてください。では又。千鶴子より



1974年10月10日

お父さま&お母さまへ

先日、いつも乳幼児観察で毎週お宅に伺うミセス・プロメイアから、姪ごさんの結婚式があるということで、ぜひにとのお招きがありましたもので、私もパーティに出席したんです。その際撮った写真を同封します。それから、ペピの写真も出来上がったので加えます。それがとても良く撮れているので、皆が大喜びです。私のカメラがいいだの、私の腕がいいだの、この次はぜひフィルムを買うから、たくさん写してくれ、だのと…。本職でも子どもの写真撮るのが難しいものなのです。私も結構嬉しがっていたわけ…。



ところで、結婚された姪ごさんというのはご主人の Mr. プロメイアの方で、つまり西アフリカ・ガーナ出身なのです。因みに花婿さんは同郷で、イギリス海軍の将校なんだとか。ガーナはかつての英連邦加盟国の一つだから、イギリスに自由に入国できたという経緯もあり、概して彼ら移民はイギリス社会において未熟練単純労働を担う労働力としてがっちり根づいており、すっかり同化しているわけ。式当日、ガーナ流の正装は Mr.プロメイアぐらいで、他の一族郎党は男女とも揃いも揃ってすっかり西洋スタイルの装いだったから、私はむしろがっかり。皆さん、妙にお行儀がいいのよ。ニコニコ愛想



よく振舞ってはいたものの、さすがの私も談話のきっかけを掴めず、ちょっと気詰まりの態で…。顔なじみの Mrs.プロメイアの学校の同僚(白人のご婦人)とお喋りしたり、子どもらと騒いでたり…。ご馳走は珍しいものがふんだんにあり、堪能しましたけど。でも結局、些か気後れ気味で、百人ぐらいの列席者が踊っている輪に加わる気にはついぞなれずじまい。おそらくプロメイアご夫妻は、彼ら一族郎党の支柱的存在なんじゃないかな。でも、国際結婚って、こりゃあどえらいことだな、と感慨を抱くこと頻りでした。ペピの将来もかなり複雑になりそう…。

それから、ちょっと冴えない失敗談があるの。実はこの結婚式のパーティに列席することで半年ぶりに美容院でパーマを掛けたの。

去年 Sidcup (【ホリス】でのこと)でのパーマ代、一番綺麗な美容院だったけど、2ポンド50だったの。えらく安かったわけ。それで最寄りの美容院では、セット・カットだと大体3ポンド近くで、腕



はいいし、まあまあのところ。それで、パーマだと6, 7ポンドぐらいと見積もっていたわけ。それがね、なんだかんだと男性美容師が二人して、ご丁寧に3時間も掛けて、それでよく

出来た、素敵だって彼らは大喜びだったけど。請求された金額が、なんと14ポンドなの。一万円なわけ！あんなにギョツとして、ポオーツとしたことなかったわ。写真の私のヘア・スタイルによく注意してみてくださいように！分不相応の大散財で、本当にゴメンナサイって感じで、まるで自己嫌悪の塊・・・あとで近くの公園の池の畔で、まったく水の中に蒸発しちやいたいような心境で、しばし茫然自失！この意気消沈ぶりが我ながら可笑しいというか、半端じゃないでしょ？！

実際にロンドンの物価高って想像以上なの。おっそろしいのよ。靴だと6～12ポンドが普通、服だと8～15ポンドが並みの部類。私は食べ物で上手に切り詰めていますけど。最近、タヴィの友だちの紹介で、ちょっとした簡易食堂だけど、美味しいスパゲティがたったの36ペニーなのよ。それで大喜びなの。いろいろすったもんだの遣り繰りってところ。先月のお母さまのたよりで、ちょっと余分のお小遣いを送ってくださるってことを伺い、やれやれと安堵したところ。つくづくやはり自分が甘いということを思い知らされて、頻りに猛反省してる。では又。千鶴子より

.....



1974年10月24日

お父さま&お母さまへ

お久しぶりです。こちらの方はもはや冬の気候ともいっていいぐらい、じめじめと肌寒く、それでも木の葉の色づきようは秋の気配です。

今日、八百屋の店先はずらっと熟した柿が並べられてあり、珍しくって感激したのでした。どうせ高いやろなあと思って恐る恐る訊いたら、10ペニーだって言うし。それで1個だけ買いました。買わずには去り難し、ってところなのでした。秋になれば柿を食べたいのは日本人だからでしょうか。その折、その男の店員に、英語で何というのかって尋ねたら、なんとまあくカキ・・・なんて舌足らずふうに言うのよ。おかしくなって、くあら、それって、日本語よ>なんて、言っちゃった！どこからか輸入されて来ているのか、柔らかくてフワフワなの。美味しそうだけど、ここしばらくは食べずに机の上に飾っておくつもりです。

これからお屋にはカボチャの煮つけを料理します。ちょっとワクワク喜んでいます。そのカボチャというのが、どうにも見掛けが日本風じゃなくて、橙色のお化けみたいのでっかいカボチャなわけ。八百屋で4分の1ほど切ってもらいました。お味が大丈夫ならいいけど、ちょっと心配してます。ここ最近、風邪が流行している模様なので、とにかくそれは困るので、極力我が身の健康には気を付けるようにしています。

さて、こちらでは、もうそろそろクリスマス・プレゼントやらカードの準備をする時期になります。私も日本の家族に向けて船便で先日送りました。お正月頃には届くかなと思ったりしてます。

送金してもらっているのプレゼントというのなんだからおかしいものですがけれども…。まあ、お勤めもしていることですし。気持ちに余裕が出来たという‘お祝い’でもあるのです。大したものではありません。コチャコチャとしたものを詰め込んで、これは誰某に貰ってもらえればいいとか、あれこれ自分一人で愉しんでいたり…。缶入りのお菓子類はあまりぱっとしないアイデアだけど、案外とお父さまやお母さまは喜ぶかも…。とにかくはるばるロンドンからですから、皆が喜んでくだされば私も嬉しいです。

荷物の中に私の声を吹き込んだカセットテープが入ってます。【声のおたより】というわけ。まあ、聴いてくださいね！でもね、それがなかなかいざとなると、話す言葉が出てこなくて長い長い沈黙があったり、言葉が妙にたどたどしく、つかえつかえだったり、私も吹き込むのに散々苦勞しちゃいました。日本語が多少怪しくなってるのかなって思ったけど…。ここに至って、【教育分析】が開始されて以降だけど、やはり自分の気持ちを語るにより慎重になっていることもあり、なかなか一筋縄にはゆかない自分を持って余す気分をどう語ればいいのか、言葉がなかなか見つからないというのが実際のところ。〈あんなしんどいの、あらへんわー！〉とか、テープの中では言ってるけど、日頃そうした愚痴っぽく聞えるようなことは英語では一切喋ってないわけです。思考回路が違う、というよりかむしろ感情処理装置〔心の機能〕が違うというか、つまり‘情緒っぽい’ものは英語表現では濾過されて、むしろ極力排除されてゆくようです。感情表現においても、見苦しくない・聞き苦しくないようにと留意し、よりいっそう巧妙に手際よくなるのでしょう。だから〈しんどい〉とか〈くたびれる〉などというのは、英語には翻訳不可能になるわけ。

無理に言おうとすると、感情にブレーキが掛かるみたい。それだから、思い切り誰かにホンネをぶちまけたいときは日本語に限ります。と云っても、家族にはくどうぞご安心ください！>と言っておきたいとの思いは山々だから、厄介至極なわけですね。

そんな折も折り、『聖ヨゼフ学園・日星高等学校』時代の吉国先生とお会いしたのです！今はシスター・ローズリンとおっしゃるのよ。もう10年も修道院生活しているってお話でした。あれから、それではなんと10年も経ったのかと、振り返ってその歳月の重みを確かめた次第です。彼女が一時滞在しておいででのロンドンの或女子修道院をお訪ねしたのでしたが、その院長さま(マザー)のご配慮で午餐の用意をさせていただいており、シスター・ローズリンとご一緒にご馳走いただきました。あれもこれもと喋っているうちにお昼過ぎて、尚も午後のティーも、それから更には夕餉までいただいてしまって、お暇したのは夕刻8時過ぎだったのよ。もうすっかり甘えてしまいました。

日本に3年近く赴任していらしたというシスター・マーガレットというアイルランド系のシスターにはひじょうに御心を配っていただきました。庭園をご案内していただき、ご一緒に散策したのですが。広い芝生が続き、奥まった藪の林やらもあって、バラ園などもあり、ひじょうに風情・趣きがありました。シスター・マーガレットは〈同郷というのは、互いに何も云わなくてもツーカーで目配せして分かりあえるものですなえ…>って、おっしゃってたけど。つまりは「以心伝心」ってこと。ほんとにそうね、と皆で笑いあったのです。おそろく、ご自分が異郷でそうした欠乏感に耐えたお人だからこそなんでしょう。私たち二人の日本語〔舞鶴弁！〕のペチャクチャを温かく微笑んで見守ってくださっておいででした。

その修道院の建物は、どうやらかなり古い由緒のある家柄のお邸を貰い受けたような印象でした。今では養老ホームといった趣きなの。つまり現役を退いた修道尼たちが余生を‘祈り三昧’に過ごす「憩いの家」のようでした。皆さん、奉仕の生活に明け暮れた一生を過ごされたのでしょうか、なにやら満ちたりたお顔で、私にもこやかに微笑みかけてくださいました。たいそう居心地良かったです。吉国先生(シスター・ローズリン)は、アイルランドに何日間か滞在して、パリへ戻る予定で、3月(来年)には日本へ帰郷されるんですって…。シスターもやはり言葉の不自由という点ではご苦労なされておいでのようなことおっしゃってましたけど。他のシスターたち(特に外国暮らしの経験のある)からの、温かい心尽くしやら配慮のある中で、まったく私など単独者にしてみれば呆れるほどに‘箱入り娘’みたいに大事にされておいでで、それでまあなんとか生き延びているといった印象でした。例えば、フランスでの修道院のお食事にチーズが出たんですって。例の臭いのきつい、ブルー・チーズだけど。それはまあ日本でいえば納豆の類で、外人さんには無理よねってところだけど。それをシスター・ローズリンが果たして食べれるものやらと、テーブルに同席のあちらのフランスのシスターたちが一様に不安げな面持ちで、じっと彼女の口元を凝視なさっていて、彼女がそれを口に入れたら、あら食べたわって、誰しもが一斉にほっと安堵して笑みを浮かべたんですって！そんな、いろんな話。状況は違っても、人の心のあれこれについて、お互いに共感できることがいっぱいありました。そもそも聡明なお方ではありましてし、おそらく今や修道会の中でも中堅として、いずれ次世代の修道尼の育成を担う重鎮におなりになれるんでしょう。海外視察の得難い機会を与えられ、地球上のあちこち飛び回っては見聞を広めておいで

なものには驚嘆します。やはりというか、間違いなしにシスターはなんともいい‘身の捨て所’を得られておいでです！舞鶴の『日星』で化学の教師で終わらなかったからこそ、これだけ破天荒な人生というか、それもローマン＝カトリックという後ろ盾のゆえにでしようが、いくなれば途方もない‘贅沢’な人生を甘受なされてると云えましょう。羨ましくないといえは嘘になるかな…。でも私はカトリック信者じゃありませんし。修道尼になるには、私の場合、「従順の徳」とは生来的に反りが合わないし、「儉約の徳」とはどうも恥ずかしながら無縁な性分だし…。それになによりも‘神の恩寵’は私に別のものを指し示しているように思えるわけだから、到底無理なわけで…。敢えて一つ羨ましいと思ったのは、彼女が私みたいに親の脛かじりで生きていないということ。親にしてみれば、どんなに‘親孝行娘’か知りません。お父さまという方は、元憲兵だったと伺いました。戦後、外地で戦死なされた元同僚のご遺族を尋ねてあちこち各地を行脚されたというお話しても…。敗戦を境にどんなにか生活も逼迫し、あれこれ憂慮を深め、ご自分を責め咎めることの多いお暮らしではなかったかと思えば、なにやらお父さまの贖罪を引き継いだともいえる、娘としての彼女の健気さには心密かに胸打たれたのです。

さらに伺った面白い話というのは、どうやらパリにもロンドンにも困った人はいるもので、特に日本人の若い女性で〔勿論信者だけど〕、異性問題で悶着を起こすのがいて、それを彼女らシスターが導くんですって。こんがらがった男女の(それも国籍が違う!)関係の纏れを解くというわけだから、どうやら心理学やら精神分析も勉強なされておいでのご様子…。‘世俗感覚’もばっちり備わっておいでだから、修道尼(シスター)というものを俄然見直す気分でした。ここに

カトリック内部に渦巻く‘改革’のうねりを感じた。信仰も教条的ではもはや人は付いてゆかないということなのかしら。‘個々の固有なる生’に降りてゆくというのが宗教者としてのスタンスというのがあるほど実に今風だなと感じ入った次第です。私などとは全然違った世界で違ったふうな意味合いでの近代的な人格の啓蒙に努めている人々の存在を知ったということになりましょう。これを機縁にこれからも修道院へ時折お訪ねすることになるかと思われます。今日早速に、アイルランドからシスター・ローズリンが絵葉書をお届けくださいました。信仰の深みがジワッと伝わる、実に心打たれることがあれこれ書き綴られてありました。私の勁さには感激したとやら、いずれその実りが確実にあることを信じているとやら。。なんて嬉しいのかしらね。

今回、久々に‘日本語に心慰められた’ということが何よりの収穫でした！やはり日本語の声音の肌触り・優しさを失いたくない。それで、やはりと思い立ち、谷口の奥さまからお招きがありましたので、ハムステッドのご自宅をお訪ねしたのです。あちらも日本語を喋りたくって喋りたくってだから、もうまるで延々と尽きない話なの。なんとまあ優に8時間も、お昼の食事をするのも忘れるほど。。海外駐在員の家族の苦労話、特に現地の学校に通う子どもたちの教育のことやらが主だけど。おそらくはお子さま方はいずれ日本の未来を背負い、国際社会に伍してゆける人材となられますのでしょう。やはり母親としての見識と覚悟のほどが違うわけ。ご立派だなあと大いに感銘を覚えました。シスター・ローズリンにしても谷口の奥さまにしても、昨今、どうやら案外と日本の女性たちが躍進しているように見受けられる。ほんとに嬉しい限りです。

では又。 千鶴子より



1974年10月31日

お父さま&お母さまへ

そちらのほうも秋の気配も深まり、落ち葉の美しい季節なのでしょう。こちらのほうは、なんとも冴えないお天気続きで、どんよりと薄暗くもあり、肌寒くもあり、どうも気持ちが沈んでしまいがちなのです。

この頃のお母さまのほうのたよりから、‘家庭内紛争’の話を伺っておりますが。。なんと云っても、夫婦の絆というものは貴いものですし、これ迄あれほど艱難辛苦を共にしてきた仲で、この今や万事が落ち着いてきたという状況になって、離婚という話もおかしなことに思われます。お母さまは、いつもいつも内心「お父さまは難しい人だ」と思い思いついてきて、それでも立派なところもある人だからと一途に信じ、そうした一途に信じ込むところがお母さまの大きな特徴でもあり、またそれがどこかしら娘たち(身近に居る者たち誰しも)の救いにもなってきたと思うのです。お父さまみたいなのはそう簡単に再び見つけれものじゃないし。この歳になって、お母さまは一体何の文句があつて喚いているのやら、お父さまには理解し難いものがあるのでしょうか。お母さまの真意を真剣に聞いたら、きっと解かってやれるはずと思うのです。これ迄、お父さまの偉い点については家庭内でも外でも、相当あれこれ云々されてきて、それが虚像じゃなく、現実に輝かしくも証明されていることは事実です。お母さまの場合は、お父さまと違った意味で、女の芯の強さなり、偉さがあるのであって、我われ家族の皆がこれ迄それに負ってきたことを認めたいわけなのです。お母さまも50を過ぎた女なのです。女が50を過ぎて、いざ過去を振り返ってみたときに思い起こすであろう悔いは、今後の

何十年かの自分をより貴重なものとして大切に
見詰めてゆかなきゃいかんという深い感慨に繋
がるはずです。お母さまは、新しく生きてみたいと
いう、何かしら止むに止まれぬ気持ちでおいで
の様子。私は頼もしく、敬意を表したく思ってお
ります。そうしたお母さまが、なにやら扱い難い存
在として、お父さまは受け取れるやも知れませ
んが、人間一人の成長(大きく生きようとする熱
意)の問題なのですから・・・これ迄解かったつ
もりでいたのは不十分なイメージだったのかも知
れませんが、今後忍耐強く、しっかりとお母さま
に寄り添ってあげてくださるよう、お父さまには
ぜひともお願いいたします。

私のほう、随分とお父さまにはご厄介を
お掛けしていますし。両親に大きな負担を掛け
ていることを心苦しく思うにつれ、自分の生き方
などを深く反省している今日この頃なのです。

いづれ又。かしこ 千鶴子より



1974年11月5日

お父さまへ

=親展=

今朝のお母さまからの手紙で、かなり詳細に状況をお知らせいただき、どうやら夫婦の
諍いの種は、私への送金の件が絡んでいるとい
った感想を抱かせられました。正直なところ胸グ
サリでした。薄々それは承知していたように思わ
れます。かねがねきちんとお許しをいただいで
ないという気兼ねを抱いておりましたし。実際の
ところ、これ迄、お父さまとはよくよく私の留学の
件で談じ合い、しっかりと了解を得ていなかった
こと、私も認めております。という理由は、私
の方で一方ならぬ不安感が強くあって、これ迄
此地で困難を乗り越えてきたことが本当に悪夢
のようでもあり、今ようやくやれやれとしなが
らも、未だもって確固たる自信をもってこ
こで是が非で

もやり遂げてみせるとは言い難いような心理状
態に陥ることもあったりで・・・やはり東洋人
で初めての自分が、ここ【タヴィストック】で頑
張ろうと本当にこの学問にぶつかっていったの
、体験的な、その難しさにもがきにもがいて来
た、過去2年間だったと思われるのです。此間
、やはりお父さまに経済的に大きく負担を掛
けていることの気の咎めが大いにあったのも
事実ですから、志なかばだろうと、事と次第
ではいつでも帰国できる態勢でいようと自
分に言い聞かせていたつもりなのです。ところ
が、すべてが雲を掴むみたいな夢物語だっ
たはずなのに、此地で徐々にいろいろな人
たちとの出逢いのなかで抜き差しならぬま
でに根を張ってゆく自分の今の現実を恐ろ
しいやら頼もしいやら、不思議な感慨を覚
えます。こちらでの滞在が長期化しそうな
気配に、お父さまにしてみれば今ひとつ
釈然としないお気持ちなのは重々察して
おります。お母さまは進取の気性の勝
ったお人柄ですし、詰まるところ私が
‘世のため人のため’になることを念じて
いて、<ようはわからんけど、チズコが
どうしてもやるというんやったら、やら
せてやりたい・・・>とお思いなの
でしょう。しかしながら、男親は女親と
違う感覚があって至極当然であります。

振り返って思い出すことがあります。
確か森の神社の初詣に出掛け、参拝の
列に並びながら、お父さまに日本の
児童臨床のお粗末な現状を縷々語
り、いつか将来、海外で本格的に
勉強してきたいと抱負を語った。
その折にお父さまは怪訝そうな面
持ちで、<それは分かったけど、
なんでチズコがそれ(留学)をせん
らんのか？>と、私に訊いた。そう
言われるのもごもっともと返答し
かねたけど、内心では私になら
出来るという微かな自負と気概
があったように思われる・・・。
とにかく、あちらに行ってみな
くては

分からないと強行突破しちゃったわけで・・・。京大の大学院を修了後に勤めていた【京都市若杉学園】をもさっさと退職したし。あの時、『京都御所』脇の烏丸通りの下宿を引き払う時だって、お父さまは軽トラックを運転してわざわざ迎えにきてくれたのよね。引越し荷物を荷台に積み、私を助手席に乗せて、3月の半ば頃だったか、たまたま雪が降っており、夜更けにあの墨絵のような世界を一路舞鶴へと走った思い出はほんとに忘れ難い！ 生来的に私はどうも夢想家タイプで‘ぼんやりさん’だから、どこまで本気かと親としては危ぶむところは大きいにあったでしょうに、よくぞまあ、ああした娘の我がまを許したものだと思う。ひたすら申し訳ないとの思いながら、なんとしてでもいつの日にか親に信用される自分でありたいと強く願ってきました。

お父さまについては、ひょんなことで日英双方の錦鯉協会の例の取り持つ縁やらもあり、私のことを厄介なお荷物とは内心思っても、どこかで自慢に思ってもらっていたような気持ちでいたのですが。お母さまから伝えられる、お父さまの言葉の端々に、それが私の一方的な、都合のいい解釈でしかなかったと思わされて愕然と致しました。それで、正直のところ、どうお思いでおられるのか、ぜひ伺いたいです。永遠に面倒みてもらおうとしているのでは全然ないのです。1年ごとに、私の状況(経済的にも、またいろんな意味でも)は、刻々変わっているのです。そんなに遠くない将来にきっとお父さまの援助も要らず、晴れて自活できる日がありましょう。ここ1, 2年のことなのですが。いかがなのでしょう？ いつもこれ迄、お父さまは最後には本当に物分りのいい態度を示してくれたので、私の方でやはり甘えているのでしょうか。やっぱり断念すべきなのでしょう？ 来週タヴィでのレポート発表

を控えておまして・・・。ともかく目先の一つ一つの責任を果たすのに一生懸命なのです。誰かって頼ることのできない今の私の状況から言えば、やっぱり、もう一つお父さまにご理解をお願いするしかないのです。出来るだけの援助をして、大きく育ててやろうというお気持ちになってもらえぬものかと、ほんと虫のいい話ですが、ただひたすら祈っているところです。

かしこ 千鶴子より



1974年11月23日

お父さま&お母さまへ

=速達=

本日、お父さまの事故の知らせ、受け取りました。工場で作業中に滑車による顔面打撲とのこと。1週間も前のことですから、手術後、回復の方向に向かっていることと思いますが・・・。その後の様子についてのたよりを切実な思いで待っています。私はショックで身が震えました。少し泣きましたけど、Dr.川口先生も親身になって出来るだけのことを尽くしてくださっていることでしょうし。お母さまも看護に精一杯のありったけ頑張ってくださいるだろうし。痛みやら傷跡が消えるのを待って、出来るだけの養生をしてくださるように祈ってます。お母さまの言うとおり、ついでに胃も徹底的に治療して、美味しく食事が出来るようになって欲しいものです。お父さまの日頃の人徳のお蔭で、周りの皆さん方、会社関係やら‘鯉キチ’のお仲間たちも、いろいろと不都合のないように取り計らってくださいることでしょし。この際、大いに他人さまのお世話になるのがよろしかろうと思われます。

実は、私のほう、17日以降ずっとおかしな(不安)現象が続いていたのです。お母さまが勤務先の病院で蹴躓いて転んで腰を痛めたという夢を見るやら、「教育分析」のセッション

中にも、自分が遠くにいる間に家のほうで何かしら起きていたような不安な気がするとか言ってるわけ！それで、私が昔幼少時に本荘の伯父さん宅に一時預けられてたとき、お母さまが象潟の海水浴場で海水浴中に太腿をクラゲに刺されて腫れ物ができ、それで手術したこともあってしばし歩行に支障をきたしていたことや、例の吹雪の日に自転車に乗っていたお母さまがスクーターに追突されて転倒したことなど、自由連想で取り留めなくもあれこれ話していたのでした。18日の夜は、タヴィのセミナーで、私が病院で初めて持ったケースの症例発表(前の週に続いて第2回目)をしたのですが、どうもなにやら他のことに気が散って、大して乗り気になれず、自分でもおかしいなあと思議だったり…。ふと頭の中で、<親が死んだという知らせが来ても、私は帰られへんやろなあ、帰れへんなあ…仕事をとおぼり出して消えるわけにゆかんし。それだけの十分なお金の貯え、まだあらへんしなあ…>とか、ヒョイヒョイと由なし言を半分無意識裡に考えているのでした。神経が異常に鋭敏になっていたのでしょう。不思議なことです。

ところで、実際には、セント・ジョージ病院のほうのセラピイの仕事は、いよいよ面白くなりそうで、断然張り切ってます。同僚の皆さん方、いい人ばかりで、症例を通して意見の交換をしたりするなど、お互いにお互いを知り合っているところです。来々週、主任(チーフ)のドクター・ウォークのご自宅でクリスマス・パーティが催されます。児童精神科外来のスタッフは全員、もしも結婚されておいでならばご夫婦でお招きを受けているわけなの。賑やかなパーティになるでしょう。それで、サンディという、同僚で独身の若いアメリカ人女性でPSW〔精神科ケースワーカー〕なのだけど、遠い地だからって私の帰宅を気遣

ってくれて、その晩パーティの後に彼女の下宿先に泊つたらいいって、親切にお誘いしてくださっているのよ。彼女は私とは違って、「ユング派」のほうに関心が向いているみたいだけど、ここロンドンでやはりいろいろ研修の機会を得ているようで、私とは職種は違っても、似た境遇なものだから、話はあれこれ尽きないのです。でも、そもそも彼女の親の親たちというのはスカンジナビア半島の出身なんだとかで、彼女の中にはいろいろな血統が入り混じっているからなのか、外国というものへの‘忌避感’もまるで無し、そもそも‘障壁’が全然ないみたい。おっとり構えていて、すごく気楽に見えるわけ。私のようなアジア系であれば、肌の色の違いやら言葉の違いやらで否応もなしに葛藤するし、お陰で此地にいて、日々まるで緊張しっぱなしなのだけど、彼女はそんなこともないのだから無性に羨ましい。あちらが決して苦労してないところで、私が四苦八苦しているといっても、実のところ、だからどうだ…ということではかないけどさ。だけど、やはり背伸びしてるなって、自分のこと折々に思うし。それで、ああ、くたびれたあってことはしばしばなのです。ドクター・ウォーク主催のホーム・パーティを楽しめるかなって、今から実はちょっと内心不安がってる。いつまで経ってもシャイ〔引っ込み思案〕な私ではいられないのは承知しているけどね。やはりイギリスのインテリ層って、その服装・物腰・話しぶりが実に独特の雰囲気なの。圧倒されないといいけど…。

ところで、「教育分析」の件だけど。日本語に深く根付いている幼児体験やら日本での文化事情やら、果たしてどう語れるものかと危ぶんでいたけど、ここに至って、ようやく「教育分析」の経験はまことに言うに言われるほどに貴重なものだと解かりました。自分の経験を咀嚼するというか、徐々に見え方が違ってくるわけ。

輻輳的に物事が見えてくるというか、何よりも自分の感情の起伏に振り回されなくなって、自分の立ち位置というのが自然に見えてくるといった感じです。私はかなり変わって来てます。あまり動じなくなったし、力強くなりましたし。専門の方のセラピイの理解力も昔と比べれば格段に違うのです。ここに至って私は本当に幸運だと両親には深く感謝しております。多大の犠牲を強いていることでの親への負い目は生涯引き受けてゆくんだろうなと自分では思っているところです。

今、いつぞやそちらから送っていただいたお琴のテープを懐かしく心慰めながらも聴いています。では、いずれ又、その後のお父さまの様子についてお知らせいただきたく、お待ちしております。かしこ

千鶴子より



1974年11月29日

お父さま&お母さまへ

お母さまからの速達のため、引き続き2通いただきました。そちらの状況を詳細にお知らせいただき、ほんとに有難いと感謝しております。日々たよりが届けられて、ようやく私の方もお父さまが回復に向かっていることを想像できましたし、『川口医院』で Dr.川口先生やら奥さまやら皆さん方から厚い看病とお心遣いをいただいている様子が解かり、安堵しているのです。

でも、お母さまは、あまり私に衝撃を与えないように事故の詳細やら傷の様子などかなり省略してるのかしらと疑ってみたり、それでまたまた猛然と不安になったりで、本当に会いにゆけない我が身が歯がゆくも悲しいです。視力の方の回復ははっきりと保証されているのですか？手紙の様子ではお父さまの容態はかなり弱っているとは言え、気分的にはしっかりしている様子が窺われ、大丈夫だろうと思っているのですが・・・

私なんて側にいたとしても、仰天しちゃって、ポケツとするか泣くぐらいだろうし。お母さまと一緒にマーちゃんそしてサッチャン夫婦がしっかりお父さまの傍らに付き添っていてくれることを思い、安心しているのです。せいぜいお大事にして、時間を掛けて養生していただきたく思います。

そう言えばふと思い出したの。その昔私がまだ大學受験を控えていた頃、お父さまが【舞鶴総監部】を退官し、《艦船サーヴィス》の会社を設立した当初だけど、慣れない会社経営の心労が募ったせいでしょう、或晩にお父さまが大変な頭痛を訴えて、お母さまが出勤して不在だったので、私が冷やしたタオルで熱を冷ましてやったことがあったのよ。そうした家族の何でもないことが、生きて嬉しくも意味深いことなんだなあ、と思ったりしているのです。

気掛かりなことは、お父さまの傷ましい姿に日々付き添いながら、思慮深いお母さまのことだから、此の度の事故のことでは随分とご自分を責めたのではありませんか？なにやらすべて私が‘蒔いた種’だという気がして、私は心苦しくてなりません。私の留学を支援するか否かを巡ってお二人に夫婦喧嘩をさせてしまって、その上に事故で父親に死なれたなどということがあれば、本当にどんなにか取り返しの付かない思いでいたかと思うのです。こんな遠く隔たっている親が事故に遭ったって看病一つも出来やしないわけで。本当に自分を親不孝だ、と情けなく思えてなりません。それでいて、英国でいわゆる外人の子どもたち相手に心理療法なんてこと、やっているんだもの。どこか矛盾しているような・・・それでも、この修練がぜひとも必要なのだとの思いは日々確固たるものとなってゆく。私はかなり慎重なタイプなので、此地での自分の進歩のほどをあまり詳しく親にも書き綴れないのですが・・・

飛び切り恵まれた状況で頑張っていると言えます。そりゃ勿論大変なのですが、どうしてもこの途でやり遂げたいという覚悟やら熱意がどこから出てくるのやら自分でも不思議なくらいです。それも親の支援のお蔭なのですしね。それは十分に承知してましたけれど、ここに至っては、己の我執というか、執念が両親を巻き添えにしてしまうことの空恐ろしさを感じています。ほんとにすべてを投げ打って帰国を、と一瞬そんな考えが頭を過ぎったわけだけど、とても今の私の現状は「一抜けた！」が出来るわけないと、我が身がどれほど此処に根を張ってしまっているかということに改めて思い知らされました。

私が何の因果か、この途で苦勞して、一番何よりも本当に心の底で嬉しいと思うことは、未だ専門家として海のものとも山のものとも知れない状態であっても、ここ近年になって両親の気持ちの中に、幾らかなりとも私に対しての信頼を築いてきたことです。本当に最初の頃は半信半疑でしたでしょうに…。だんだん私がついつつ峠を越えてゆく姿に誇りを感じてくださって、そして今ここで改めて、惜しみない援助をするとの親よりのお言葉をいただきましたことが勿体なく、どれほど嬉しいか知れません。

『上村松園』という女流日本画家が、母堂の死なれた後も、必ず出来上がった作品を誰よりも真っ先に、その遺影の前にお見せすると言っていたのが、たいそう印象深いのです。どんなことがあっても、親の深い愛情があればこそ、私は生きてゆけると思うのです。本当に此の度のような事故は今後決して起こらないことを信じて、お二人とも仲良く、和氣藹々と生きて暮らしてゆかれることを切に祈ってます。私としてもいずれ存分に償いをさせていただくことになりましょう。かしこ

千鶴子より

《追伸》

ところで今日、ローランドとポーリン(シール夫妻)から私宛に誕生日おめでとうのカードが届きましたのね。おっかしいの。私、そんなこと言った覚えが全然ないのに。向こうも日にちが正確かどうか確かじゃないけど…なんて言ってたけど。感心しました！私にしても、出来ることがあれば折々に、金銭的な負担を考えずにやってあげることもあったのは確かだけど。それに対して彼らからもちゃんと返って来るもの(気持ちかね！)あるってことはいい感触です。でも本当のところ、まるっきり親掛かりで、私自身はまったく無力なのだから、ちょっとどうかなっていつも気が引けるけど…。

先日も、鯉ディーラーの神畑氏(例の姫路の神畑重三さんって方)からお手紙いただいたの。いつぞや【英国錦鯉協会】主宰の講演会のためにわざわざロンドンにお越しいただいた件で、私が一筆、感想やらお礼を述べておいたお返事なのでしたが…。新潟の山中に1週間ほど入って居て、古き良き日本の情趣を大いに楽しんだとやら、愉快なお手紙でした。そのロンドンでの経験から、来春頃から社員を一人ロンドンに特別派遣することが内定されているんですって…。さすがだね。いよいよ本格的に動き出したんだ。やはり此地で錦鯉の熱烈な愛好者が増えるにつれて、業者への不信感というか不満が沸騰してゆくみたい。なにしろ気候が寒冷だからでしょうが、こちらの素人筋が鯉を飼う上で今ひとつ困った事情が頻発してゆくみたいだし。日本からの‘助っ人’として神畑さんらに是非ともご尽力いただかなきゃね。勿論彼らにしても、これはビジネス・チャンス！これだけの‘鯉キチ’たちを逃す手はないということでしょうね。いずれ時期がくれば、英国の業者らも錦鯉を飼うノウハウを立派に育まれて、徐々に不信感を払拭してゆくものと思われるけれど…。取り敢えず

はシールさんにしてみれば、生半可ではない、徹底した Dr.川口先生の‘鯉キチ’ぶりに圧倒的な信頼を寄せておられるのは間違いないし、賢明な選択かと思う。「たかが鯉、なれど鯉」で、皆が地球上のあっちでもこっちでも、業者も素人も、錦鯉愛好の同志というか、その‘鯉キチ’たちの熱意の昂まりには断然心踊るものがあります。

ところで、Mr.&Mrs.アレン夫妻から折に触れて、舞鶴のお父さまとお母さま宛にお手紙が届くようです。まるでペン・フレンドしてみたいじゃありませんか！彼らからの心尽くしの贈り物、『英国の園芸』の本は届きましたか？Mrs.アレンがちょっと気を揉んでらしたのね。こういう事態なので、あちらに御礼のお返事を出すどころじゃなかったでしょ。私の方から宜しく伝えておきましょう。いずれ又。 千鶴子より



1974年12月9日

お父さま&お母さまへ

ここしばらくたよりが途絶えていますので、その後のお父さまの容態をととても気掛かりにしております。だからと言って、お布団に潜って泣いて日々を暮らしているわけではなく、元気ハツラツと仕事やら勉強などに追われ頑張っているわけで…。そこら辺が何とも苦しいわけなのです。国際電話してお父さまの声を聞かないと安心できないとも思うけど、おそらくいざ話そうとしても、どんなにか涙でビショビショになって、声も出せずに終わりそうですしね。それでその代わりといっちはおかしいのですが、お父さまが編集・録音してくださったテープ類、民謡やら歌謡曲やら琴の曲などを、部屋のなかで、この頃ひっきりなしに流しています。お父さまの若々しいアナウンスの声が時折入っているわけで、懐かしんでおります。

仕事のほうは、最初の頃の不安な気持ちも消えて、安定してきております。なんと云っても、やり甲斐があります。日本でなら山積みケース[症例]を抱え込むことになるでしょうけど、ここでは一応総てのケースは担当の精神科医が診断した後、心理治療の必要と見做されたケースを私の方に依頼してくるという手続きを踏みます。毎週1回ですらも来所できる状況にある子どもはなかなかそう多くはありませんし。いろんな条件がうまく整って、それでは私がお引き受けしますと言える迄には、何ヶ月も(時には一年以上も)診断期間を要するわけで…。そんなわけで今迄のところ、どうにか3ケースほどが私の担当ということで辛うじて本決まりという具合です。1症例については既に6週のセッションを終えております。毎回のセラピイのセッションの記録を丁寧に記録し、それを Mr.ジョン・ブレンナーにじっくり聴いていただき、あれこれ有意義なコメントをいただいております。なによりも驚いたことは、こちらの子ども相手にセラピイしながら、英語でなんとか喋れてますし、子どもとも通じ合えるって感触がまずまずあることです。自信を持つことが大事なのだと思ってます。

他の職種の方々との連携やら、なんやかやと動き回る中で、ごく自然にセラピストとしての自信のある物腰が身に付くことでしょうし。幸いなことに、同僚の皆さん方と仲良くやれていることは嬉しい限りです。タヴィでのトレーニングのごく初期の段階にあって、はたして実際にどこまでやれるのかと自分の臨床の技能の程が時折疑われて不安になったりすることがあるわけ。いずれにしても、決め手は教育分析の体験であり、自分がどれだけ自分の深層心理を理解するか、それ如何ということらしい。幸いなことにそちらもひじょうに発展的な関係にありますし。勿論、いろんな動揺もあるにはあるんだけど…。

ところで、先日金曜の夜、病院関係のスタッフのクリスマス・パーティが、病棟主任のドクター・ウォークのご自宅で催されました。いわゆる‘持ち寄り’のパーティだったの。皆さんそれぞれがお手製のお料理やらボトルやらを持参なされて、随分と豪勢なご馳走でしたわけ。私は、お寿司(稲荷さんと卵焼きの茶巾寿司と巻き寿司)を持参しました。皆さん、珍しがられて、とっても褒められ喜ばれたのです。私もようやく皆さんのお仲間になって、気分的にくつろいで、お喋りも楽しめるようになったということはなんとも不思議で、云うなればそれだけの月日を費やしたわけだけど、此地でのあんなこんなの過去の思い出がたとえ辛くとも、振り返って今ひじょうに貴くも重たくも感じられるのです。人生ってのは、やっぱり生きてみるものなのですねえ。

私はいつになったら、親から経済的に独立して、仕事の上でも後世に残る程の業績をやり遂げられるか分かりませんが…。私は一生お二人を親として持ったことを誇りとも、また喜びとも思い、有難く感謝して生きてゆくんだろうと思われます。それは、私一人のみで終わることではなく、私の子どもの、その子孫に繋がる愛と信頼の絆であることを信じております。

ところで、先程 Mrs.アレンからお電話がありました。お父さまの事故のこと、とても心配してくださってます。私がシール家に知らせたからなのですが、どうぞ一日も早く全快して下さるようにとのこと。皆さん方が、私も勿論、ただそれだけを祈ってます。お母さまも気持ちを明るくね。あまりご自分を疲れさせないように。どうぞご自愛ください。いずれ近々、いいおたよりがあることを切にお待ちしてます。かしこ 千鶴子より



1974年12月12日

お父さま&お母さまへ

ようやくにして久し振りに家族の無事息災のたよりを今日いただいて、私もほっと安堵しております。もう今頃はお父さまも退院して、やっと我が家の池の可愛い鯉たちの顔を眺めていることでしょう。そんなにも早く快復出来たなんて本当に夢のような気持ちになります。事故も悪夢であったとは言え、現実にもっと悪く起こり得たかも知れないのですし。たくさんの方々にお見舞いいただいて、そのお返しが大変だなんて言われるのは、なんとしても幸せなことです。本当にやっと安心致しました。病院生活ってものは大概のところ無味乾燥なもので、かなり苛立ちの多いものですけど、鯉仲間の Dr.川口先生の医院でお世話になり、友愛的ないたわりに包まれて過ごせたこと、本当に有難いことでした。

ところで、病室に飾ったとかいう、シールさんがお父さまへの見舞いとしてわざわざそちらに送り届けてくれた、私のでっかいポートレート写真のことだけど。いつぞや彼の庭で撮ったやつなのね。どんな風に撮れていたのやら、はっきり覚えがないのだけど、そんなにお見舞いに来る人来る人に見られたなんて、もうほんとに恥ずかしい！親にしてみれば<これがロンドンにいる我が家の不肖の娘です…>と言うわけにもゆかなかったわね。私としては身の縮む思いです。ローランドのひよいとした思いつきというか、彼の心づかいが、此の度は意外と当たって、舞鶴の両親に随分と感激されて、また一つあの人の株が上がったというわけね。まあまあ、良かった！世の中、何がどういうことに繋がるのやらほんとに不思議…！お父さまは此の度たいそう痛い目に遭われ、本当に辛かったわけだけど。たまたま Dr.川口先生が優秀な整形外科医であったことは、

ほんとになんて幸運だったのかしら！ Dr.川口先生ご一家のあたたかい看護を受けて、尚いっそう両家の繋がりが緊密になれたことは、有難いと言えば有難いですよね。お父さまにまるで‘兄貴’のような存在が出来て、私はそのこと、とても喜んでおります。やはりなんと言っても、家族の輪から広がって、他人との繋がり、その輪を拡げてゆくことが、いろんな意味で人生を生き甲斐のあるものとするでしょうし…。

ところで、アレン夫妻は例のジャパン・ツアーには不参加ですって。‘経済上の理由’とおっしゃってらしたけど。というよりも、年齢のこともあるでしょうね。でも、おそらくはいずれ【英国錦鯉協会】の会長やら事務局長やらを退いて、どうやらローランドに継承させようとしているんじゃないかなと思うわけ。だから来年のジャパン・ツアーの企画、おそらく次期会長としての彼の器量なり手腕が問われるわけで、ローランドにしてもぜひとも成功させなければと意気込んでるのよ。私思ってもみなかったことだけど、ふと閃いたのよ。ローランドは舞鶴行きをすごく熱望してて、ツアーのお仲間を何人か是非お連れしたがるわけだけど。Dr.川口先生はじめ舞鶴の‘鯉キチ’たちとの再会やら親睦は嬉しいに決まってるけど。もしかしてなによりもお父さまの石庭をお仲間の‘鯉キチ’たちにぜひとも見せたいという強い思いがあるのかも知れない。既に私から借りたお父さまの庭の写真をこちらで誰彼に見せてるわけだし。案外、彼の今回の企画には舞鶴の山上昇の存在は不可欠なのかもしれない。だからお父さまの事故の知らせを聞いて、彼は肝をつぶしたに違いない。それで、なんとしてもお父さまに快復してもらわねばって切実に思われたのよ。実に生きてるって、人それぞれ様々な人生が絡み合うってことなんだねえ。それが嬉しいご縁・繋がりと呼べるものならほんとにいい！

それよりも、お母さまが「舞鶴整肢学園」勤続15年の表彰を受けるんですってね！おめでとう！！本当に大変な15年やったわねえ。いろんなこと、難しい人間関係の職場であることは間違いないけど、Dr.錦織園長先生ご夫妻の信望は厚いし、園の子どもらには慕われてるし、人間の感情の機微に通じる、良き人生勉強をなさったとも云えるわけで、感慨深いですよええ。とりわけ ADL 訓練の責任者として、様々なアイデアを駆使して日々奮闘してこられたこと、ほんとにご苦労さまでした！

歌詠みのお母さまは、「サキクサ」短歌会の主宰・大塚布見子先生とのご縁を得て、歌誌「サキクサ」にも折々にお母さまの歌が載ることがあったりだけど。お母さまが肢体不自由児の子らとの日常を詠んだ歌が実に大きな収穫だと思うの。看護婦であるお母さまにしか詠めない歌がいっぱいある。「知的技巧に走らず、写実平明に自分を表現し、無垢な心で詠むこと」を提唱なさる歌人としての大塚布見子先生のご指導そのままに、ほんとに素直な、いい歌を詠まれてます。「サキクサ」同人仲間でも山うつる枝のファンが結構いるみたいじゃありませんか？！ほんとに我が家の自慢です！たくさんたくさんある中でも、次の2首が私のお気に入りなの。

- ・野に坐りわが膝に抱く麻痺の児は
翔びゆく鳥を指して声あぐ
- ・坐りゐて玉入れ競ふ足萎えの
児らの瞳に秋日あかるし

ともかくにも、お召し物も新調なさったとか。晴れての表彰式には美しく装われて、ぜひお写真を撮って、私の方へも送って寄こしてください。私の方、お蔭さまで少しずつ生活が落ち着いてきております。かしこ 千鶴子より

.....



1974年12月18日

お父さま&お母さまへ

今日この頃は、此地ではクリスマス
を間近に控えて、あちこちと行事が華やかに催
されています。今日
は Mrs.プロメ
イアの小学校で
催された『クリ
スマス劇』を見てき



ました。簡単な、いつもと変わらず幼子キリスト
誕生のお話なのだけど、ヨゼフやら羊飼いやらそ
れぞれの役柄は違っても、誰にとっても晴れ舞



台だから真面目な
顔でセリフを必死に
なって言ったり、星さ
んたちも音楽に乗っ
て踊ったりで、日本

での学芸会の様子と全然違わないの。私もあ
んな頃があったと懐かしい記憶を大いに揺さぶら
れました。あの頃はあの頃で、幸福だったのだな
としみじみ思う。旭川小学校の時の学芸会では、
一年生の私が抜擢され、晴れがましくも《は
じめの言葉》のご挨拶を舞台上で述べたんだっけと
か。阿見小学校では演劇でコマドリの役をやっ
たとか。そう言えば、あのときもお母さまは編み機
械でセーターを手作りしてくださって、あのセー
ターの青と緑の色合いが垢抜けたセンスで大好き
だったの。そんな些細な事柄の記憶が次々と・・・
記憶は繰り返し反復されることで甦り、想い出
されようとするものだね。それは、精神分析の要
諦でもあるけど・・・。私も自分の子どもの学芸会
を見に行くことがあるのかしらと思ったのよ。日本
でもクリスマス・プレゼントってものはや慣習的にな
ってるでしょ。勿論、我が家ではお父さまの母親
がクリスチャンだったから一応お祝いしたり、娘ら

3人は必ずプレゼントを貰う習慣があったけど。
私が親になっても、我が子にクリスマス・プレゼン
トなんてやったりするのかしら。そんなあれこれ物
思いにしばし浸っていたってわけ・・・。

クリスマスそしてお正月を迎えて、地
球上のどこでも忙しない気分満ちていること
でしょう。私からのクリスマスのプレゼントがそちらに
届いたとの手紙いただきました。そもそもがお父
さま(お母さまも含めて)の懐から出ている(起源
的には！)わけですので、有難がられるのは何や
面映い気持ちですけど・・・。喜んでいただいたの
はやはり嬉しいです。いろいろなもの、珍しいもの
を見る度に親にも見せてやりたいと思う、これっ
て人情なのですね。

ところで、つい最近私と同じコース
(タヴィストック・センター)に聴講生になって入ら
れた白崎さんという方がおいでで、タヴィのミセ
ス・ハリスからのご紹介もあり、親しくしてるのよ。
彼女のご主人は『竹中工務店』にお勤めの建
築家で、どうも此地で建築士の国際免許取得
を目指しておいでのようにです。小さな女の子さん
がおられます。昨今、ロンドンに建築関係で留
学してこられておいでの日本人が増えているみ
たい。それで白崎さんご夫婦の交友関係の拡
がりに私もちょっと便乗させてもらってるの。ご自
宅でのパーティに招かれることがしばしばなんだ
けど、白崎夫人はお料理がとっても本格的、プ
ロ並みの腕なの。メニューの豊富なこと。郷里の
仙台のすごく美味しいお味噌汁なんかもいただ
けちゃうので、もうすごい嬉しい。ご一緒にお招き
されてお越しなのが、皆さんご家族連れだから、
そりゃ賑やかなの。小さい子がうろちょろ・・・。ま
ったく乳幼児観察の絶好の機会でもあり、日本
語のお喋りも嬉しくって・・・。なにやらロンドンに日
本人が大挙してやってきているというわけでもな
いでしょうが、ここ最近、びっくりするほどです。

『欧日協会』といって、ヨーロッパに在留している日本人の親睦団体があるんだけど。そこが運営する図書室がロンドンの南端にあると知って訪ねてみたのよ。日頃読みたいと思っていた本が(小説類)がたくさんあって、もう驚喜しちゃったの。それから、偶然私の後から来た若い男の人に声掛けしたら、大學を卒業したばかりで遊学しているんですって。なんでも【少林寺拳法】を此地で広めようとしているんだとか。えらい張り切った好青年で、そこで図書係をしていた女の子とも意気投合し、3人で楽しく夕食を一緒にしたのでした。お正月には私のフラットでホーム・パーティをしましょうと企画してるの。そんなこんなで、なんだか日本語を喋る機会がぐんと増えてます。県女大で親友だった美枝さんが、電気関係がご専門の研究者でいらっしゃるご主人の留学に伴い、ノルウェーにしばらく滞在していらしたんだけど日本に帰国されたとか。私の身近でも、来年の春頃には日本へ戻ってくるとやら、そんな軽いお喋りをチラホラ耳にするにつけ、そんなに簡単なのかと思わずにはいられない。まさに軽々と地球を跨いで歩いているみたいな感じよね！

私の方、この頃何かと多忙であります。やっとのことで、何もかも総てが軌道に乗ってきたと云えそう。家族が無事であること、理解してもらい支援されていることでの精神的安定感には実に大きいと思われます。ほんとにお蔭さまと感謝致しております。ではいづれ又。千鶴子より



1974年12月30日

お父さま&お母さまへ

今頃は、大晦日を迎えて、いつもの如く、そちらは暮れの忙しい日々でしょうが。この手紙が届く頃は、お正月で家族皆が集まって、

のんびりとくつろぎ、また賑わいを極めていることでしょう。こちらのこのどんよりと冷え込む季節には家恋しさ・日本恋しさがいっそうに募りますもので、たいそう過ごしにくい日々ではあります。

クリスマス休暇の3日間、ストラットフォードのケトル家に滞在してきました。イギリスの冬の田舎は霜がかって樹木も枯れてはいますが、なかなか風趣があります。リンゴ園などもあり、春の花が咲く頃にはどんなに晴れがましく、美しい景観かと思いました。幼少の或時期過ごした札幌で、借家の裏手がリンゴ園だったことが懐かしく思い起こされました。偶然でしたが、ケトルさんの妹さんご夫婦と娘さんがオーストラリアから5年ぶりの帰郷で、もうそりゃあ賑わって大変でした。肉親の語らいというものはいいものです。積もる話があるものですから、喋り止むということがなくて、私は側で頭がパワーアップしたほどなものでした。それぞれの居場所でそれぞれ自分の人生を求めて頑張っているわけだけど、やはり外国暮らしともなれば、誰しも心の支えとして血筋・姻戚との絆にすがりたくなるわけなのよね。

今日は、日頃ご懇意にさせていただいている谷口の奥さまからのお招きで晚餐をいただきました。お子さま方が3人もというわけだから、なんだかんだと賑やかにワサワサやっていると、孤独な身で異国で奮闘している侘しさなんて吹っ飛んでしまう・・・ご主人さまも、躍進する日本経済を背負う JETRO(ロンドン・センター)の要職にいらしてご多忙な身でいらっしゃるでしょうけど、やはり寄り添うご家族が傍らにいればどこかで息抜きもおありでしょうし。私ももう一つ何とか私生活の面で飛躍が欲しいものだと思ってます。では、いっそうの平安がありますように。良きお年をお迎えてください。かしこ 千鶴子より